

空とぶ自転車

スミー 作 白木茂 訳 浜田紀子 絵



白木 茂（しらき しげる）

わたしは青森県に生まれましたが、小さいときから自転車が好きでした。まだことも用の自転車がないころで、くろうしておとな用の自転車にのつたものです。そのころから、空とぶ自転車があつたらなあと思っていました。

浜田 紀子（はまだ みちこ）

ポールは、イギリスの国のお友だちですが、自分の考えですばらしい自転車を手に入れることができました。

あなたの乗っている自転車はいかがですか。わたしもこの仕事をしながら、また一つ教えてもらったのです。

基本カード記載例

N.D.C. 933	スミ
空とぶ自転車	
文研出版 1976	80p 23cm 文研子どもランド

空とぶ自転車 《文研子どもランド》

訳者 白木 茂 発行者 佐藤 武雄

発行所 文 研 出 版 東京都文京区向丘 2-3-10 大阪市天王寺区大道 4-128

印刷所 西口印刷株式会社 / 製本所 倉橋製本株式会社

© 白木 茂 1976 BS-761103

・著者との契約により検印廃止

空とぶ自転車

スミール作
白木茂訳
浜田紀子絵

文研出版



もくじ

自分の自転車さえあつたら	4
うりものの自転車	10
自転車をしらべに	20
バーゲンさんの店で	34
やあい、おんぼろ自転車！	45
ふしぎな自転車	54
新聞記者とのインタビュー	62
よいことと悪いこと	70

原作 ドナルド・スミ―

訳 白木 茂

絵 浜田 紀子

空とぶ自転車



自分の自転車さえあつたら

「みんな、自転車にのつて、白バイのおまわりさんごつこをしようぜ。」

と、テリーという男の子が言いました。

「そりゃ、いい！ やろう、やろう！」

と、子どもたちは、いつせいに、さんせいしました。

ポールといつしよにあそんでいた男の子や女の子は、みんな、自分の自転車を取りに、家へとんで帰りました。

あとには、ポール一人が、のこつてしまつたのです。

「もつとカウボーイごつこをやれないわけはないのになあ。つぎは、ぼくが悪者の手から、ジルを助ける番だつたんだ。カウボーイが、すばらしいはたらきをするはずだつたのに……」

と、ポールは、ぶつぶつひとりごとを言いました。

でも、女の子のジルは、自転車にのつて、もどつてくると、自分が、まるで荷物



かなんかのように、なわをかけられて、助けだされるのをまつ役は、もういやだと、言いました。

「自転車にのつてカウボーイごっこをするほうがいいわ。だって、どこへでも走っていていけるし、それに自転車を、うまのかわりにすることだってできるんだもの。うまにのらないカウボーイなんていないわ。」

「自転車を、うまのかわりになんか、できるもんか！」

と、ポールは、ばかにしたように言いました。でも、それだけ言うとは、あとはだまっでしまいました。自転車を持っていないのがくやしくて言っただけなのです。

ほかの子どもたちが、まるで競輪の選手やジェット機のパイロットのようになつこうをして、走りまわるのを、ポールだけは、いつもだまっで、楽しそうなふりをして、見ていなければならなかった。

いまでも、仲間たちは、めいめい自転車にのつて、もどつてくると、ポールのまわりを、ベルをならしながら、ぐるぐるまわりはじめました。

大將かぶのテリーが、大声で言いました。

「ポール、どいてくれよ。君は、交通巡査なんだから、交通せいりをしてくれよ。」

「交通巡査になるのは、もうあきあきしているんだ。」
と、ポールは言いました。

「なぜ、おとうさんに自転車を買ってくれと言わないんだ？」

と、ジンジャーという男の子が言いました。

「言ったさ。でも、とても高いからね。」

「あとで、ぼくのをちょっとだけかしてやるよ。」

と、テリーが言いました。

「いいんだ。ぼくには、だいじな用があるからね。」

「そう。じゃあ、帰って、それをかたづけてしまいなよ。」

「うん。じゃあ、帰るよ。」

ポールは、そう言うのと、急いで帰っていき

ました。
ジルが、自転車で、ポールのあとをおいかけると、かどをまがったところでおいつきました。



「ねえ、ボール、中古品でも、すてきな自転車があるわよ。あたしのもの、そうなの。」
ボールは立ちどまって、ききかえました。

「いくらぐらいしたんだ？」

「やすかったわ。これは、たったの六ポンドよ。」

「六ポンド！ それにしても大金だな。」

「いまじゃ、そうじゃないのよ。このあいだのテレビの子どもの時間に、古いお金をいっぱい持つてでた人を見なかった？ その人は、二百年前には、一シリングで、どんなものが買えたのか、教えてくれたわ。むかしは、一シリングで、いろんなものが、どつさり買えたのよ。」

「うちには、テレビだつてないんだ。」

「まあ……。じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

ジルは、自転車のむきをかえると、ペダルをふみながら、言いました。

「あたしの自転車にのつてみる？」

「ありがとう。でも、のりたくないから。」

ボールは大声で言つて、かけだすと、ブルーベル・ウッド小公園にかけこみました。池の岸で立ちどまると、

「つまんないの。」

と、ひとりごとを言ってみました。カエルが、池にボチャーンと、とびこみました。
「つまんないの。」

と、ポールは、またつぶやきました。

池の中で、頭をあげたりさげたりしていたクイナが、鳴き声をたてました。

「そうだとも……」

ポールには、その鳴き声が、そんなふうに聞こえたのです。ポールは、いやな気がしました。

「ようし、石をぶつつけて、おどろかしてやるぞ。」

ポールは、あたりをきよろきよろ見まわして、大きな石をひろいあげました。そして、そろそろと池の岸に近づき、石を投げこもうとしたとき、ポールは、さつき、ジルの言った中古品の自転車のことは、いままで一ども考えたことがなかったのを、急に思いだしたのです。

おとうさんは、新品の自転車をかうことなんか、ここ、二年ほどのあいだは、とんでもないことだと言っていました。

「中古品の自転車だって、新品の自転車と、そうちがわないだろうよ……。六ポンドなんかでなく、ニポンドでだって買えるだろうさ。それに、ぼくは貯金箱に十五

シリングためてあるし……」

と、ポールは、ひとりごとを言いました。家に帰るとちゅう、まだ石を持ってきたまま
でいるのに気づきました。でも、そのときは石はかるく感じられたのです。スミス
さんの家の前庭の白セメントをかためてつくった石の上に、みどり色をしたその石
をきちんと置きました。

「そうだ、みどり色の石をもつととつてこよう。そうすれば、セメントの白い石が
ほうれるぞ。」

と、ポールは、そんなことを考えました。さいわい、そのときは、スミスさんは
すのようでした。

遠くで、ジルが自転車じてんしゃをのりまわしているすがたが見えました。ポールは手てを
ふつて、大声おおこえで言いました。

「ジル、きみの考えは、すばらしいよ。ぼくは、中古品ちゅうこひんの自転車じてんしゃを買かつてもらうこ
とにきめたからね。」

遠くとほにいるジルには、ポールがなにを言ったのか、よくわかりません。でも、う
なずくと、手てをふつてみせました。ポールは、また言いました。

「ほんとうに手てにいれるよおうっ！ 中古品ちゅうこひんだってなんだって、自分の自転車じてんしゃだつ
たら、どんなにいいだろうな。」

うりものの自転車

ポールは、家に帰るなり、言いました。

「ママ、とてもだいたい話があるんだけど。」

おかあさんは、急にそう言われたので、おどろいて、もうすこしで、プディングにカスタードをかけてしまいそうになりました。

「だいたい話って、なんなの？」

「とても、だいたいなことなんだ。」

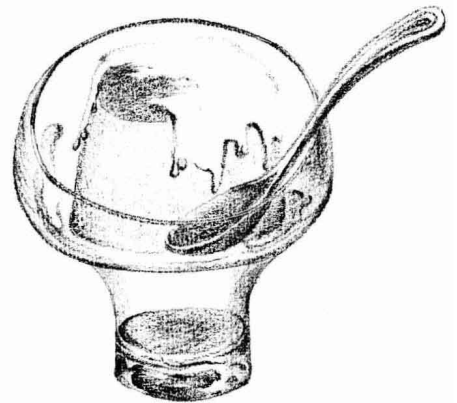
「まあ、ちよつとまつてよ。あんたの夕食を、オープンにいれるからね。」

「いれなくていいんだ、ママ。そのまま、いいんだよ。プディングを食べると、
ぼく、力がつくもの。」

と、ポールは、大きな声で言いました。

おかあさんはわらって、

「あんたが、また、まどガラスをわったりして、パパがべんしようしなければなら
ないんだったら、力のつくプディングを食べるのは、パパのほうじゃないかしら？」



と、言いました。

カスタードプディングを食べているあいだはしずかでしたが、食べおわると、ポールは言いました。

「まどガラスなんか、なんまいわったって、平気なうちが、なんげんもあるんだけどな。ねえ、ママ、うちはびんぼうなの？」

「びんぼうじゃありません。でも、お金持ちというわけでもないのよ。ところで、あんたは、まどガラスをなんまいもわったんじゃないでしょうね。」

ポールは、気を悪くしたように、

「一まいもわからないよ、ママ……。ねえー、すももはあまっていけない？」

「いいえ、もう二十二こも食べたでしょ、ほら。だいじな話って、なんなの？」

ポールは、自分が自転車を持つていないために、いろんなことで、どんなにひきめを感じているかを、話しました。

「まあ、それはたいへんなことだわ。」

「うちに、そんなゆとりがないのなら、それなりの自転車でもいいんだけどなあ。」

おかあさんは、ポールの手をにぎると、

「そういうわけじゃないのよ。パパもわたしも、道路はあんなに車がこんでるでしょう。それに、あんたには、まだはやいと思うってたからなのよ。」

「あんなこと言つてらあ。ジルだって、ぼくよりずっと小さいよ。なかには、くしゃみをするから、そこにいるのがやつとわかるくらいの子ビだって、のってるんだよ。」

「じゃあ、パパに話してみましよう。パパとあんたが、よく話しあえるようにね。でもボール、もちろん、新しい自転車はだめよ。それで、パパに見せる、やすく買える中古品の自転車の広告はあるの？」

「そうだ。それ、それ！ ママ、ぼくのカウボーイのベルトを知らない？ ジルやテリーたちと、インディアンごつこをするときにするベルトだよ。」

「ベッドにほつておいたでしょ。ベッドから床へぶらさがっていたわよ。」

おかあさんはふざけて言いました。

「ワワワワ……」

と、いつものところで、インディアン声をあげると、みんなは集まってきました。大將かぶのテリーは、中古品のよい自転車を手にいれるのは、なれないと、なかなかうまくいかないものなんだと、言いました。

「ぼくらは、まず、どこかで新聞の地方版をかりてきて、自転車をゆずりたいという人の住所をしらべなければならぬんだ。それに、ハンマーを持つていかなきゃね。」
「どうして、ハンマーなんかがいるの？」

と、ジルがききました。

テリーは、いつも、仲間たちが集まって、インディアンごっこをする場所のそばの、かきねの上から、あたりを見まわしながら、

「スパイがいるかもしれないから、用心しなくちやね。」

と、小声で言いました。

「ああ、わかったわ。ハンマーは、スパイの頭を、ごつんとやるためのね。」

と、ジルが言いました。

「いいや、スパイは、ハつぎきなんだ。」

と、げらげらわらいながら、シモンという、小さな男の子が言いました。

テリー以外、みんな、それがいちばんよいとさんせいしました。

「テレビにでくるむほん人みたいなもんだ。むほん人は、テレビでは銃殺刑なんだぞ。」

と、テリーは言いました。

「ハつぎきだ。切りきざんでしまえ。」

と、シモンが言いはりました。

そして、みんなが、スパイのミンチなんかつくりたくないと思うまで、そういうのをやめませんでした。

テリーは、みんながしずかになると、ハンマーのことを、ゆつくり、せつめいしはじめました。

「中古品の自転車^{ちゆうこひんじてんしゃ}をうる人のなかには、いんちきな人^{ひと}がいるんだよ。まっ黒にぬつたボール紙^{がみ}で車体^{しやたい}をつくってるんだ。だから、雨^{あめ}にぬれるまではわからないんだよ。」
「どうやって、ボール紙^{がみ}で自転車^{じてんしゃ}をつくるの？ 自転車^{じてんしゃ}は、どれもきんぞくのくだか、かねでつくるんだわ。」

と、ジルがばかにしたように言いました。

「そりや、そのとおりさ。でも、ぼくがいま話^{はな}している、いんちき自転車^{じてんしゃ}は、ほら、君^{きみ}たちが大通りのプラッシャードの店^{みせ}でよく見^みかけるだろ。布地^{ぬのじ}をまいてあるし、んのボール紙^{がみ}。あのまるいつつで、つくつてあるんだよ。」

「まあ、そんな自転車^{じてんしゃ}もあるの？ じゃあ、あんたといっしよでなけりやだめね、テリー。」

と、ジルは、びつくりしたようすで言いました。

「さあ、みんな自転車^{じてんしゃ}にのつて、ぼくについておいで！」

子どもたちは、まず、物置^{ものおき}から、ハンマーを一ちようかりてきて、それから、みんなそろって、通り^{とち}にあるプリントさんのお店^{みせ}へ、新聞^{しんぶん}を買い^かにいきました。でも、思^{おも}ったほどかたんではありません。新聞^{しんぶん}は一部^{いぶ}四ペン^しスします。ところが、だれ

ひとり、お金を持っていなかったのです。

ポールが、プリントさんに言いました。

「中古品の自転車をゆずりたいという、広告の住所をうつすだけだから、五分間だけ、新聞をかしていただいけませんか、プリントさん。」

とたんに、プリントさんの顔色が、むらさき色にかわりました。プリントさんは、ドスンと、カウンターをたたいたので、たなの上のガラスびんの中のキャンディが、ガラガラツと、音をたてました。

「ここをなんだと思ってるんだ。図書館じゃないんだぞ。店の新聞をただで読ませたら、このわたしがどうやって生活していけるんだ！」

と、プリントさんはどなりました。でも、テリーは、びくともしないで、ちゃんと返事をしました。

「ぼく、いま、上着のうらポケットに一ペンス持っているんだけど、一ペンスで新聞を見せてもらっただけなら、いいでしょう？ 中古の自転車の広告を見たい人に、一回一ペンスで新聞を見せたら、たくさんお金がもうかるでしょう。なん万ポンドも。」

「それに、新聞を持っていつちやうわけじゃないし……」
と、ポールも言いました。